日経連タイムス　昭和61年2月20日　木曜日

# 木曜評論

## 2年目を迎えた放送大学

# 学習意欲高い学生
# 大学教育改善に寄与

日本学術振興会理事長
木田　宏

### 広く大学教育の機会提供

放送大学が二年目を迎えて、応募者が激減し、定員の半分にも達していないと報ぜられた。昨年度は、一万人募集の予定に対して、一万九千人を超える応募があり、一万七千人が受け入れられたのであるが、"二月末で七千二百人"という出足は、"激減"と報ぜられても致し方あるまい。しかし初年度と比べて、PRが不足していた放送大学にとっては、こうした世人の注目を浴く報道も、有難い声援であると思われる。

放送大学の第一の目的は、広く社会人や家庭婦人に大学教育の機会を提供することにある。入学試験がなく、学歴や偏差値も問題ではない。広く学習意欲のある者を受け入れて、学習の契機を提供する。このため昨年は、予定をはるかに超えた応募者の期待に応える努力が払われた。予定外の試行であった。三十代、四十代の人々を中心として、十八歳から八十歳を超えるところまで拡がった学生は、六十歳を超える高齢者が千人近くもあり、また、高卒の資格を持たない特修生と呼ばれる人も千二百人を上回った。

このように学歴や経験の様々な学生を自一杯に受け入れて、教師も学生も初めての教授、学習を、放送や面接で繰り広げたのであるから、さぞかし、その努力は大変だったであろう。二年目の学生数が大きく昨年を下回ったとしても、なお二万数千人に上ると予測される学生を擁して、科目数をふやし、昨年にもまさる試行の努力が続けられることと思われる。

放送大学は、教養学部に、「生活と福祉」「発達と教育」「社会と経済」「産業と技術」「人間の探求」「自然の理解」という六つの専攻を用意し、哲学、文学などの人文系の授業科目から、法律学、経済学などの社会系の諸科目、そして、数学、物理学、宇宙地球科学、医学、薬学等の自然系の授業科目まで今年は百七十一科目（六十年度百四科目）を提供する。私も時折、テレビの十六チャンネル、FMの七十七メガサイクルに合わせて、放送大学の番組を視聴するが、宗教学、住居学、栄養化学などの講義を見聞して、身近な事柄にも知らないことの余りにも多いことに驚き、またその斬新な講義の進め方に、楽しみさえも覚えるのである。

しかし、それにしても、学生となって単位を認定して貰うには、それなりの努力が必要であろう。前期ごとの期末試験をうけ、単位の認定を受けうる者は、学生数の半数程度になっている。このことからも、決して安易に学習が進むものでないことが分るのである。ただ、多忙なはずの三十代の人々が、他の年代の人々より高い合格率を示していること、普通の大学入学資格には足りない特修生が、なかなかの成績をあげていることなどを聞くと、学生諸氏の学習意欲やその熱意に頭が下る思いである。

特修生は、十六単位以上所定の単位を修得すれば、大学入学の相当資格ありと認定されて、正規の学生と同様に取り扱われる仕組みになっている。二学期までにその認定を受けた者は、六十一人なども上っているのである。

### 時代ニーズ満たす授業科目

放送大学のもう二つの大きな目的は、大学教育の改善である。情報化時代を迎えて、大学教育に新しい展開が加えられなければならないことは、放送大学に限ることではない。しかし、情報化への対応を積極的に講じて、大学教育の改善に資することは、新しいメディアに取り組む放送大学に課せられた大きな使命であると考える。放送大学は、情報化時代に生きる人々の求める教育内容とそれを提示していく新しい手法を開発して行かなければなるまい。放送大学の授業科目の構成やその番組をみれば、このことに対する積極的な取り組みへの意欲がうかがえるのである。

放送大学は、四月、八月、十二月に始まる三学期制をとっている。科目登録の受付・決定、通信指導とその評価、試験日時の通知、採点評価、成績通知、そして次の科目の登録申請という教務の運びが三回繰り返され、教師、学生とも、緊張の連続であるといった声も聞こえている。それに放送番組や印刷教材の作成、評価、改訂も行われていく。放送授業と面接授業の在り方も、担当者が別人となれば、いろいろな連絡調整を図らなければならないことが生じることであろう。

### 新学習社会の建設に邁進

こうした放送大学の講義、番組、教材などが、一般大学の教育活動にどの程度寄与しうるものとなるか、また一般の大学との協力がどのように拡がるか、CATVその他のメディアによって、市民の幅広い学習活動にどのように使われることになるかなど、その将来にいろいろの課題と期待が待ちうけている。

それゆえ、放送大学は、学習意欲に燃えた学生とともに、新しい学習社会の建設に向けて、新しい教育内容と学習過程についての提案、試行を続けなければならない。市民の学習意欲をかき立て、かつ、その学習意欲を幅広く受け入れて、学習に対する充実感を与えていく。この基本課題に向けて、二年目もまた、放送大学の関係者および学生諸氏に、初心の努力を期待したいのである。

木田氏